



Hakuai Story

博愛物語

新たな夢に向かって（Ⅴ）

—前代未聞の大移転—



移転後に残った跡地を高額で売却しなければ移転の見込みが絶たれる。孤独な登頂だった。数社に及んだ交渉では、先行する交渉相手と契約破棄を敢行し、紆余曲折の末、K建物と想定額を上回る跡地売買の仮契約が成就した。

大きな艱難を碎き、跡地の売却に目途が立ったことで、資金調達への第一歩を踏み出すことが出来たのではあったが、この売却代金も移転に必要な総額に照らし合わせれば、『焼け石に水』に過ぎなかった。別途、多額の融資を実現できなければ、新天地の購入や新病院の建築に充当する資金は枯渇した俣だった。

その不足額は約 50 億円。天文学的な数字だった。目標の峻峰は、正に霧中の彼方に姿を^{くら}晦まして、未だ、その位置すら^{かくにん}も目視できないでいた。

皮算用が前提の資金調達計画では、不足する資金の半分ほどは、社会福祉医療事業団（事業団）からの融資を目論んで

いた。この事業団とは、国の医療の普及や質の向上に資するため、病院や診療所などの設置や機能向上に必要な資金を長期かつ低利で融通することを目的に設立された政策金融機関である。1960年に設立された医療金融公庫から1985年に制定された社会福祉・医療事業団法により特殊法人の社会福祉医療事業団に引き継がれ、2003年には、現行の独立行政法人福祉医療機構へと変革された。言わば、^{とうじ}往時も、^{いま}現在も医療や福祉施設に於いて資金調達の頼みの綱だった。

特に、新規事業の資金調達で本事業団から融資の同意を取り付けることは、専門分野に特化した金融機関の性格上、資金調達全体にも大きな影響を及ぼし、他の金融機関から追加融資を受ける際にも有利に働いた。

先ずは、何としても、この事業団からの同意を取り付け、残り50億円の資金調達への弾みとしたかった。

北九州市選出の国会議員の秘書を務めていた同窓生のS氏

が力を貸してくれた。国会の議員会館を訪問しては、彼の紹介する人脈を頼りに、事業団の本店や九州地区を所管する大阪支店への出張を繰り返した。

当初、事業団に持ち込んだ資料^{けいかく}は、現在の姿^{いま}とは違って、全敷地を病院のみで活用する計画^{もの}だった。病室のほぼ全数が個室で占められた贅沢な造りの新病院は、現在に比べると1.5倍の床面積を有していた。言ってみれば、現在の建物全体を病院だけで活用するような計画案だった。

予審の席の担当官は、移転事業の趣旨には大きく頷きを呉れるものの、肝心の財務計画の説明に移ると断定的な口調で、

「難しいでしょうね」と繰り返^{うろん}し、胡乱な表情を浮かべた。

「土地を買い取らずに、借地には出来ませんか。もう少し建築面積を縮められたら如何ですか」。

過重債務による財政面での不健全さを危惧するものだった。

初期投資額を抑え、借入金の減額が必須との指摘だった。財

務計画の無謀さを危ぶみ、移転自体の困難性にまで言及した
的確な指摘だった。

東京本店の在る神谷町や大阪支店へ至る本町へは、通いに、
通い詰めたが、この行き詰った局面を打開する秘策もなく、
時間だけが空しく過ぎて行った。

「この俣では、元本償還どころか、金利負担にも耐えられな
いでしょうね。計画を、抜本的に練り直してお越し下さい」。

帰路の新幹線の車窓に、街の灯りが未練を繋いだまま流れ
てゆく。所詮、無理頼みでしかないのか。資金が調達できな
ければ、全ては烏^{うゆう}有に帰し、移転は絵空事となる。仮契約と
は言え、約束を交わした跡地売買はどうなるのか。想像すれ
ば身の毛のよだつ生き地獄だった。自らの蒔いた大言壮語の
火種が原因で、大火となって尾羽を打ち枯らしてゆく光景が
迫ってくる。自業自得だった。出口のない暗闇に迷い込んだ
気分だった。希^{おも}いの強さだけでは叶わない不随意な現実が、

鉄の ^{かたまり}塊 となって重く押し掛かっていた。

著者 那須 良昭

発行所 医療法人財団 博愛会

〒810-0034

福岡市中央区笹丘 1-28-25

tel:092-741-2626 fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます

